

論文

小学校での学びにつながる幼児の姿と生活科の授業の工夫

Collaboration between kindergartens and primary schools: Approaches in the Living Environment
Studies class

玉瀬友美 (高知大学教育学部・高知大学教育学部附属小学校)

池本浩子 (高知大学教育学部附属小学校)

中山美香 (高知大学教育学部附属幼稚園)

廣瀬愛 (高知大学教育学部附属小学校)

植田優 (高知大学教育学部附属小学校)

都築郁子 (高知大学教育学部附属幼稚園)

大西美玲 (高知大学教育学部附属幼稚園)

岡林律子 (高知県教育委員会)

TAMASE Yumi¹, IKEMOTO Hiroko², NAKAYAMA Mika³, HIROSE Ai², UETA Yu²,
TSUDUKI Ikuko³, ONISHI Mirei³ and OKABAYASHI Ritsuko⁴

1 Faculty of Education, Kochi University

2 Elementary School affiliated with the Faculty of Education, Kochi University

3 Kindergarten affiliated with the Faculty of Education, Kochi University

4 Kochi Prefectural Board of Education

ABSTRACT

In this study, a subject learning sharing sheet was developed to facilitate connections between early childhood education and primary school education. The sheet comprised the following topics: “subject content,” “behavior of five-year-old children in the third trimester of a kindergarten class,” “what we want young children to develop by the end of kindergarten,” “assistance for young children provided by kindergarten teachers,” and “innovations in subject teaching from April to May of the first year of primary school.” Kindergarten and primary school teachers collaborated to create this sheet. Teachers from kindergarten and primary schools from the Faculty of Education of Kochi University prepared this sheet; one primary school teacher conducted a living environment studies class for first-year students, while kindergarten teachers observed the lecture and noted their observations. The results suggest that the sheets developed in this study can be used to effectively link early childhood education and primary school education, using the topic of “what we want young children to develop by the end of kindergarten” as a guideline.

問題

幼児期の発達や学びは、遊びを通して促され育まれていくものであり、子どもたちはそれぞれの環境の中で新たな経験を積み重ねながら、日々変化し続けている。そのような変化は、様々な環境の影響を受けつつも、就学後の生活においても途切れることはなく、生涯にわたって子どもたち一人ひとりの人格が形成されていく。

平成 29 年に改訂された幼稚園教育要領では、幼児期の教育において育みたい資質・能力が「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」という 3 つの視点から捉えられている。これらの視点が、同じく平成 29 年に改訂された小学校学習指導要領においても共通していることは、幼児期の教育は小学校以降の子どもたちの生活や学習の土台となるものであること、そして、幼児教育と小学校以降の教育との連続性を踏まえた指導が重要であることを改めて示しているといえよう。

しかし、それまで幼稚園、保育所、認定こども園等において、生活の流れにそって比較的自由度の高い活動の中からさまざまな体験をし、遊びを通して学んできた子どもたちが、時間割に従って活動を切り替え、到達目標に向かって自覚的に学習することを求められる小学校での生活に適応することは容易であるとは言いがたい。このような幼児教育と小学校教育における段差をできるだけ滑らかなものにするため、幼保小連携に関してさまざまな取り組みがなされてきた（高橋・清水，2017；安達，2022；川崎 2022；上竹，2022；渡辺，2022）。

文部科学省(2022)は、これまでの幼保小連携の成果として、「幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の 3 要領・指針の整合性確保」「幼保小接続期の連携の手がかりとして『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』策定」「小学校との連携の取組を行っている園が約 9 割に上るなど、取組が進展」を挙げ、課題として、「幼稚園・保育所・認定こども園の 7～9 割が小学校との連携に課題意識」「半数以上の園が行事の交流等にとどまり、資質・能力をつなぐカリキュラムの編成・実施が行われていない」「『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』が到達目標と誤解され、連携の手がかりとして十分機能していない」「『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』だけでは、具体的なカリキュラムの工夫や教育方法の改善方法がわからない」「小学校側の取組が、教育方法の改善に踏み込まず学校探検等にとどまるケースが多い」などを挙げている。

本研究では、幼保小連携の成果としてだけでなく課題としても取り上げられている「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に焦点をあてた。そして、それを教科の学びにつなげる姿として捉えなおすことによって、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が幼児期の教育と小学校教育の接続のより有効な手がかりとなりうるかどうかについて、生活科での

実践を通して検討することを目的とする。

なお、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（以下、「10 の姿」と表記する。）とは、「健康な心と体」「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」である（文部科学省，2017）。これらは、幼児期にふさわしい活動を通して資質・能力が育まれている幼児の具体的な姿であり、保育者が指導を行う際に考慮すべきものであるが、到達目標ではなく幼児教育修了時に見られる姿の方向性を示したものである。

生活科と「10 の姿」に関する先行研究

平成 4 年度から小学校第 1 学年と第 2 学年に設置された生活科は、幼児教育と小学校教育との円滑な接続を行うための中心的教科である。松寄(2018)は、生活科を中心としたスタートカリキュラムの実践内容から、小学校入学後の子どもの「10 の姿」の見取りを通して幼児教育を生かした小学校教育の在り方を検討している。そして、1 年生の担任教師が 4 月から 6 月まで月に 1 回、24 名の子どもたちに「10 の姿」のうちのどの姿が見られたかについての見取りを行った結果、「10 の姿」がまったく見られなかった人数は 4 月で 14 名、5 月で 10 名、6 月で 6 名であったことから、「小学校入学後の子どもを幼児教育で育った姿の観点で育ちを見取ることができ、小学校入学直後よりも、学校生活が進み慣れてきた頃により多く姿を見ることができた」と述べている。松寄(2018)では、どのような場面での見取りなのか明記されておらず、見取りの根拠は示されていないが、小学校教師にとって「10 の姿」を見取ることが難しいことは推察されよう。

井口(2020)は、小学校入学当初の生活科を中心とした合科的・関連的な指導に向けて、「10 の姿」を踏まえた幼保小連携が重要であるが、「実際の保育現場では、活用の仕方を誤り、『10 の姿』探しに終始したり、『10 の姿』を 5 歳児終期の『できた、できない』という達成度評価として捉えがちになったりする可能性も否めない。」と指摘し、「10 の姿」が保育現場ではどのように活用されているのかを検討するために、41 名の保育者を対象に、「10 の姿」の利用と課題についてのアンケートを実施している。

その結果、幼保小の連携において「10 の姿」を活用した経験がない保育者が 54% と過半数を占めていた。また、「10 の姿」の活用が共通理解をはかる上で有効であるかという問いに対して「どちらともいえない」という回答が 60% であり、有効性の実感がもていない保育者が多かった。このような結果から井口(2020)は、『10 の姿』は小学校との連携において十分な活用がなされているとはいえない現状があった。

「本来、『10 の姿』は、小学校との共通理解を図るための有効な手立てとして作成されたものでもあるが、現状としては、

まだ十分な共通理解が図られているとはいえない。アンケートからも、小学校教員の必要感はあまり感じられないというのが現状のようである。」と述べている。

このように、生活科と「10の姿」に関連づけた研究からは、「10の姿」の活用が幼保小の共通理解をはかる上で有効であると保育者は実感できておらず、小学校教師にとっても「10の姿」は見取ることが難しいものであることがわかる。「10の姿」は、「幼小の共通言語」（今井・後藤, 2017）となるよう整理された幼児教育修了時の幼児の姿であり、平易な言葉が用いられている。しかし、平易な言葉であるからこそ、それらの言葉が幼児教育と小学校教育においてどのような意味で用いられているのかについて確認し合うことが必要ではないだろうか。

高知大学教育学部附属幼稚園・小学校における連携

高知大学教育学部附属幼稚園と附属小学校は、幼児と児童が交流する機会を設けたり、保育者や小学校教師が保育や授業を参観したりといった交流をしてきたが、平成30年度からは高知県保幼小接続期実践プラン（高知県教育委員会, 2018）を活用して「10の姿共有シート」を作成し、幼小の共通理解を図ってきた。資料1は、「10の姿」の1つである「健康な心と体」の共有シートの例である。

高知県教育委員会が作成した「10の姿共有シート」は「10の姿」それぞれについて、幼稚園における「子どもの姿」「保育者が大切にしていること」を記入する枠があり、それらに対応して小学校における「子どもの姿」「小学校教員が大切にすること」を記入する枠がある。このシートは、幼稚園でみられる姿が小学校でのどのような姿につながっているのかを整理したり、保育者と小学校教師が教育において何を大切に考えているのかを知ったりする上で有効である。しかし、「10の姿」が幼児と児童においてどのような具体的な姿であるのかはわかっても、それが小学校での教科の学びにどのようなつながっているのかについてはこのシートだけでは明確に捉えることができない。

文部科学省は、幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）の中で、幼児教育と小学校教育がつながる工夫の一例として、『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』が、小学校の各教科等の活動や育みたい資質・能力等にどうつながっていくのかについて、相互に対応させる方法を考える必要があるのではないかと指摘している（文部科学省, 2022）。

そこで、本研究では、「教科の学びにつながる10の姿共有シート」を作成した。資料2には、生活科に関するシートを示す。このシートでは、小学校学習指導要領における生活科の内容ごとに、保育者が幼稚園年長3学期にみられる「小学校での学びにつながる幼児の姿」「10の姿」「保育者が大切にすること」を記入する。そして、その内容を踏まえて、小学

校教師が小学1年の4～5月における教科のそれぞれの内容に関する指導の工夫を記入してシートを完成させ、保育者と共有する。こうすることで、保育者は、幼児の姿が小学校の教科のどのような学びにつながるのか、そして、小学校教師が幼児期での学びを配慮しながらどのような指導の工夫をしているのかが「10の姿」と関連づけながらわかり、小学校教師は「10の姿」を、「教科の内容」と保育者が捉える「幼児の姿」と関連づけて理解し、授業の工夫に生かすことができる。

次に、生活科の実践例を報告する。

生活科実践例：1年生「体を動かして友達と仲良く遊ぼう」

1. 授業の概要

日時：令和4年4月20日（水）5校時 高知大学教育学部
附属小学校1年生（32名）
場所：体育館
スタートカリキュラムの一環として、体育科の「体ほぐしの運動遊び」と算数科の「なかまづくりとかず」の学習に関連させた実践を行った。資料3に指導案を示す。

2. 指導にあたって

（1）児童の実態と教師の願い

本校は、校区が広い様々な園から児童が入学してくる。例年ほぼ全員が毎日元気に登校してくるが、幼稚園や保育所で一緒に過ごした友達が少ない、またはいない等の理由で、入学当初は不安を抱えている児童もいる。そのような児童の実態から、入学後は教師や友達と仲良くなること、児童の不安を取り除き安心して学校に来るために重要だと考えている。知っている友達が少しずつ増える中で、学校がだんだんと児童の居場所になり、安心して学校に来ることができるようにしたい。また、児童が安心して学校に来るためには、児童と教師のつながりも重要である。教師が児童にとって安心する存在になることや、児童同士をつなげる役割を担うことが必要である。

本学級の児童は、学習を楽しみにしており、「国語はいつやるの?」「宿題はないの?」等と話している。また、南庭で遊ぶことを楽しみにしており、うんていに挑戦したり、鬼ごっこをしたりして友達と関わる姿が少しずつ増えてきている様子が見られる。その一方で、挨拶が少ない、友達の気持ちまでは考えられずに自分の思いを伝えてしまう等の姿も見られている。しかし、このような児童の姿は、入学して間もないために自分のことで精いっぱいであったり、新しい環境に緊張していたりすることによるものではないかと考える。日々一生懸命学校に通う児童が安心して楽しく学校生活を送るためにも、友達や教師に会ったら「おはよう」と言ったり、友達の名前を呼んで手を振った

りする姿を増やしたい。また、友達と何かをすることが楽しいと思える経験を積み重ねることで、友達を大切にしたり協力したりできるようになってほしいと考える。

(2) 活動のねらい

授業の中では友達と関わる活動を取り入れ、児童が友達の存在を意識したり、友達に自分の存在を認めてもらったと感じたりすることで、楽しいと感じられるようにしたい。例年、学年団で1日の流れや留意点を話し合って実践に臨んでいるが、今年も学年でアイデアを出し合い、各教科の中で友達と関わりが持てる活動を考え実践している。また、教科の特性を生かしたり、教科を関連させたりしながら、児童が楽しいと思う活動を取り入れるようにしている。本時は、体育科の「体ほぐしの運動遊び」と算数科の「なかまづくりとかず」の学習を関連させた活動を行う。大きなねらいは、「友達と一緒に体を動かして遊ぶと楽しい」と感じる体験をさせることである。そのために、思い切り活動させること、これまでにやったことがある活動を取り入れて見通しを持って活動できるようにすること、さらに、児童が考えて何かをしようとしていることに対する肯定的な言葉掛けを意識して実践に臨む。

(3) 活動の内容

まず、教師の周りに自由に集まった児童に活動場所のルールを確認する。本時では、体育館の前面に椅子が並んでいるため、「どんなことに気をつける？」と尋ね、「椅子のあるところにはいかない」等、児童の言葉でルールを確認する。次に、これまでに経験している活動の中から「踊り」「おーちたおちた」「体じゃんけん」を提示し、「どこから遊ぶ？」と問いかける。すると、児童は「パプリカを踊りたい！」等の反応を返すと予想される。意見が割れることもあるだろうが、児童が素直に「～したい」と伝えられたことを認め、「どうするとうまく決められるかな？」等と間に入って活動の順番を決めるようにする。実際に児童が運動遊びをしているときは、「友達と目が合っていて素敵!」「体を大きく動かしているね」等、「仲良く」「体ほぐし」という視点で肯定的な声掛けをしていく。次に、「なべなべそこぬけ」を行う。算数科「なかまづくりとかず」と関連させ、太鼓の数を聞いてその数で集まり、集まった友達となべなべそこぬけで遊ぶ。集まる数をだんだん増やすことで、ワクワク感を持てるようにしたい。また、いろいろな友達と関われるように、なべなべそこぬけの後には、「ばいばい」と手を振りスキップで動き回るようにする。数が多くなると困難さが生じるが、困難さを全て解消するのではなく、児童同士で相談したりアイデアを出し合ったりする機会と捉え、児童にある程度任せるようにしたい。必要に応じて教師が介入し、活動を整えることで、成功体験を得ることができるようにする。その際、みんなで拍手をしたり、喜びを体で表現したりすることで、一体感を感じら

れるようにしたい。また、友達とアイデアを出し合って困難さを乗り越えようとしたことや、うまくいかないことがあっても活動を楽しもうとした児童の姿を称賛することで、友達と関わることの楽しさを感じられるようにする。

3. 活動の実際

(1) 「体ほぐし」

踊り、「おーちたおちた」遊び、「体じゃんけん」の順に運動遊びを楽しんだ。児童が自分の思いを表現しやすくなるように、「どこから遊ぶ?」「みんなは、どうする?」と教師が言葉掛けをし、全体の活動に生かすことができていた。教師の「いっせーので」が合図となって皆で声や動きを揃える楽しさが生まれ、活動への意欲へとつながった。また、児童の目線に合わせて、しゃがんだり座ったりしてかかわったり、児童にわかりやすい大きな動作でダイナミックに動く教師の姿は「楽しいから参加したい」という児童の主体的な学びにつながった。

(2) 「なかまづくりとかず」

教師が鳴らす太鼓の音の数を聞き、その数の仲間が作れたら座る、というルールに基づいて、体育と算数を関連させた「なべなべそこぬけ」遊びを楽しむことができた。数を確かめてみようという教師の声掛けから、児童は自分達で数え始め、数への意識を高めることができていた。

「なべなべそこぬけ」遊びで32名の輪になった時には、「どこあけちよくか決めちよかないかん」と言う案が児童から出され、児童が主体となって活動ができていた。児童の「どうすればいいんだろう」という発言に対して、教師は「どうしたらいいかな?」と児童に聞き、うまくいきなときには考える時間が作られたことで、児童が納得して活動に取り組むことができていた。

(授業者による振り返り)

・授業構成については、「動」の活動が多かったため、1年生の児童にとって体力的な負荷が大きく、活動に向かう集中力が途切れがちであった。「動→静→動」といった授業構成をすべきだった。

・「なかまづくりとかず」については、児童の生活経験と数が密接に関係していることがわかった。例えば、8人の8という数は学校生活の中でまだ身近なものではなく、児童にとって即座に対応することは難しい様子であった。「2」は「お隣さん」、「4」は「班のお友達」など、生活と数を関連させて捉えていくような言葉掛けをしていくとよいと思った。また、もっと少ない数で変化をつけながら繰り返すと面白くなったかもしれない。32人で「なべなべそこぬけ」に挑戦した時、何とか上手く行った場面があった。普段は喜びなどをあまり表現しない児童が手をたたいて喜んでしたことから、解決が容易なものから難しいものまで、様々な経験をさせることの大切さを感じた。

4. 保育者の感想

上記の生活科の授業は公開されたものであったことから、7名の附属幼稚園の保育者が授業を参観していた。資料4は、参観した保育者の感想文の抜粋を示したものである。倫理的配慮については、感想文を作成した保育者に対して調査趣旨を説明し、文書による調査協力の承諾を得た。本研究における調査対象者は全て仮名で取り扱い、対象者の人権に配慮した。

資料4を見ると、「教師との関係性がしっかりできている」「主体的な学びへとつなげていっている」「子どもたちの意見を吸い上げて」「子どもから出た案を取り入れて」

「子どもの反応を肯定的に引き出す関わり」といった記述がある。これらの記述から、保育者と幼児との信頼関係ならびに幼児の主体的活動といった、幼児教育において大切にされていることが、小学校教師によっても同様に大切にされて授業が展開されていることを保育者は感じ、幼小の学びの連続性を再確認できたことが読み取れる。さらに、『「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について授業者が指導案等で明確化したり、意識したりすることで、子ども達の学びが幼稚園から小学校へとより濃くつながっていく」という記述からは、「10の姿」が幼保小接続の有効な手がかりとなることを保育者が実感できていることが推察されよう。

また、「幼稚園で経験してきたことを生かしながら、授業を行ってくださっている」「幼稚園での学びが小学校でこのように引き出されている」といった記述からは、幼児期の子どもたちの姿が小学校の教科での学びにつながっていることを、保育者が再確認できている様子がわかる。「体を動かす楽しさを味わうことができるよう、様々な工夫をなされていた」「手を繋いだり目や息を合わせたりしながらグループ作りをする活動を組み込んでおり、工夫されている」

「凝縮された学びの多さに驚きました」といった記述からも、「10の姿」の中の「健康な心と体」「協同性」といった項目を教科の内容と関連づけて授業を工夫している小学校教師に対する保育者の理解が推察できよう。また、「今後も情報交換をしたり、互いにすぐに実践に生かすことができるような内容のやりとりができたりすれば」「お互いの実践の（原文ママ）見合って情報交換することで、校種間の段差をより意味のあるものにしていけるのではないかな」という記述からは、小学校との連携に対する保育者の意欲を読み取ることができる。

考察

本研究では、幼保小接続の課題として取り上げられることが多い「10の姿」に焦点をあてた。そして、「10の姿」を、幼児期の教育の中で子どもの姿として捉えるだけでなく、教科の学びにつながる姿としても捉えなおすことに

よって、「10の姿」が幼児期の教育と小学校教育の接続のより有効な手がかりとなりうるかどうかについて、生活科での実践を通して検討した。

本研究で作成した「教科の学びにつながる10の姿共有シート」は、「教科の内容」「幼稚園年長3学期にみられる幼児の姿」「10の姿」「保育者が大切にすること」「小学1年4～5月における教科指導の工夫」から構成されており、保育者と小学校教師が協働して作成するものであった。

シート作成過程において、小学校教師は、各教科の内容につながると保育者が捉えている年長3学期の幼児の姿と、保育者が捉えた「10の姿」およびそのような姿を育む上で保育者がどのような援助を大切に考えているかを知ることができた。その上で、それまでの子どもの学びや受けてきた援助を考慮して、教科の指導の工夫を案出することができたのである。

小学校教師にとって「10の姿」を見取ることが難しいことを報告している研究はあるが（松嵩, 2018）、本研究において、小学校教師は「10の姿」を見取り、幼小の接続を踏まえた指導の工夫をしていた。「子どもの姿」の捉えに関して保育者と小学校教師の間に大きなずれがないことは、「幼稚園で経験してきたことを生かしながら、授業を行ってくださっている。」「幼稚園での学びが小学校でこのように引き出されている」といった保育者による感想文の記述からわかる。

一方、保育者は、シート作成過程において、小学校での各教科の内容を確認し、幼児の姿が小学校でのどのような学びにつながるものであるのか、それがどのような「10の姿」と関連するのかを考え、そのような幼児の学びの姿を援助するために保育者として何を大切に保育を行っているかを振り返り、小学校教師が、幼児の姿を理解した上で教科の各内容に関してどのような授業の工夫を行うのかを理解することができたと考えられる。

授業を参観した保育者の感想文からは、「10の姿」の活用が幼小接続の有効な手がかりとなることを再認識するだけでなく、幼児期の学びの姿と「10の姿」および小学校での教科の学びとの関連性、そして、それらを踏まえた授業の工夫を理解していることが示唆された。そして、小学校との連携への意欲についても記述されていたのである。

文部科学省(2022)は、5歳児から小学校1年生を「架け橋期」と名付け、幼児期から児童期の発達を見通しつつ、5歳児のカリキュラムと小学1年生のスタートカリキュラムを一体的に捉える「架け橋プログラム」の必要性を指摘している。幼児教育と小学校教育をつなぐ重要な手がかり、つまり「架け橋」となるのは「10の姿」である。橋は、2つの「岸」に架けられる。一方の「岸」は、幼児教育の側にあり、総合的な体験の中で遊びを通した学びの姿である。そして、もう一方の「岸」は、小学校教育の側

にある、教科別の学びの姿である。これまでは、幼児教育の側にある学びの姿とそこから延びる橋である「10の姿」は示されてきたが、小学校側の「岸」は明確に示されてはこなかった。本研究で作成した「教科の学びにつながる10の姿共有シート」は、「架け橋」の「兩岸」を明らかにするものであり、これによって、保育者と小学校教師は「10の姿」を幼保小連携の共通言語として活用し、お互いの子ども理解の枠組みを再確認することができていた。

今後は、生活科以外の教科についても「教科の学びにつながる10の姿共有シート」を作成し、幼保小連携を進めていきたいと考えている。

【引用文献】

- 安達譲(2022) 幼児の思いや願いを実現する指導の工夫—架け橋期におけるプロジェクトを通しての五歳児の育ち— 初等教育資料, 1-22, 28-31.
- 井口眞美(2020) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を保育の質向上に活かすために 実践女子大学生活科学部紀要, 57, 19-36.
- 今井康晴・後藤正矢(2017) 改訂幼稚園教育要領と改訂小学校学習指導要領における幼小接続 東京未来大学研究紀要, 11, 171-179.

上竹陽子(2022) 教師同士の相互理解を図るための「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の活用 初等教育資料, 1022, 24-27.

川崎哲兵(2022) 豊かな体験を生み出し、互恵性のある交流の実現に向けて 初等教育資料, 1022, 20-23.

高知県教育委員会(2018) 高知県保幼小接続期実践プラン

松崎洋子(2018) 幼児教育の学びを生かしたスタートカリキュラムの実践 千葉大学教育学部研究紀要, 66, 2, 91-98.

文部科学省(2017) 幼稚園教育要領 p.13-15.

文部科学省(2022) 幼保小の架け橋プログラムについて https://www.mext.go.jp/content/20211215-mxt_youji-000019507-8.pdf

最終閲覧日 2022年4月29日

高橋泰道・清水葉月(2017) 幼児教育と小学校生活科との接続に関する研究—幼児期から小学校低学年の原体験とものづくりの現状— 人間と文化, 1, 183-189.

渡辺省三(2022) 六年間の学びや生活の基盤をつくる指導の工夫—架け橋期におけるスタートカリキュラムの意義— 初等教育資料, 1022, 32-35.

①健康な心と体

園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。

子どもの姿(幼稚園)

- ・「今日は昨日の続きをしよう」「一輪車に挑戦しよう」など、自ら積極的、主体的に選択し、自分で、または友達と目的をもって、心と体を動かして遊ぶ。

〈体を使った遊び〉

- ・体を精一杯動かしたり、うまくコントロールしたりできるようになり、サッカーや鬼ごっこ、縄跳び、竹馬、一輪車などの様々な活動に自分なりに目標をもって挑戦する。
- ・ダンスでリズムや曲のイメージに合わせて表現したり、息を合わせてかけ声をかけたり、動きを合わせたりすることを楽しむ。



〈健康〉

- ・給食弁当を通して、いろいろな味に親しみ、苦手なものでも頑張って食べようとし、いろいろな味や素材にふれて食べることが喜ぶ。また、一緒に食べる楽しさを感じる。
- ・風邪などをひかないように、手洗い・うがいが必要なることを理解し、進んで取り組もうとする。
- ・トイレでズボンを全部下ろさないで排泄をしたり、ひとりで始末ができるようになる。
- ・自分で衣服を着脱し、暑さ寒さによって衣服を調節する。



〈安全〉

- ・事前指導、予告なしの避難訓練でも放送が鳴ったらやまっていることをやめて聞いたり、近くの先生の話を聞いて自分の身を守る行動をとり、状況に合わせた動きを理解するようになる。
- ・基本的な交通ルールがわかり、自分で守ろうとする。
- ・一方で慣れから気がゆるむ姿も見られる。



保育者が大切にしていること

- ・子どもが自ら主体的に環境にかかわって心と体を働かせて遊ぶことができるように、子どもの興味・関心に基づいた環境を構成し、子ども自ら遊びを選択することができるようになる。
- ・進んで体を動かし、多様な動きを楽しむことができるような環境を作る。
- ・クラスで活動で子ども達がサッカーやしっぽとりなど、ルールや作戦を考えながら体を動かすことを楽しむことができる運動遊びを行う。
- ・立ったまま衣服の着脱をしたり、トイレでズボンを全部下ろさないで排泄したりすることを促し、保護者へもその必要性を伝える。
- ・自ら健康で安全な生活をつくりだすことができるように、避難訓練や交通安全を行い、手洗いなど日常的な日々の指導を積み重ねたり、クラス全体で考えたりする機会をもつ。

子どもの姿(小学校)

〈体を使った遊び〉

- ・友達を誘って南庭で元気に遊ぶ。
- ・遊んでみたい遊具や遊びを見つけて仲良く遊ぶ。

子どもが、何をすればよいか考え、見通しをもって行動している姿を評価していくことで、教師に促されなくてもできるようにしていく。

〈健康〉

- ・3食規則正しい食事をする。
- ・早寝、早起きをし、朝ごはんをきちんととって自力登校する。
- ・給食を通して、いろいろな味に親しみ苦手なものも努力して食べるとともに、食事のマナーにも気を付けながら食べる。
- ・給食を食べた後歯磨きをする。
- ・授業中トイレに行かなくていいように、休み時間に自分でトイレに行く。
- ・外から帰ってきたら進んで手洗いうがいをする。
- ・汗をかいたら汗をふく。

〈安全〉

- ・避難訓練などを通して災害時や非常時に自分の身を守ろうとする。
- ・基本的な交通ルールがわかり、ルールを守って登下校できる。

小学校教員が大切にすること

- ・生活科の学習を通して、南庭を子どもにとって安心して遊べる場所にする。
- ・見通しをもって生活できるよう、一日の流れや学習の流れを視覚的に示すようにする。
- ・通信などで規則正しい生活が家庭でもできるよう呼びかける。
- ・「昨日は寝るのが遅くなった」「友だちと仲良くできるか心配している」など、子どもの健康状態や心の状態をお家の方に知らせてもらおうようにする。学校での様子も通信や連絡帳等で伝えていき、家庭と連携をとりながら子どもが安心して生活できるようにしていく。
- ・養護教諭と連携をとり子どもの心身の状態について把握していく。

資料3 指導案

体を動かして友達と仲良く遊ぼう		
実施時期	4月第3週(9日目)	
目標	体を動かして遊ぶことを通して、数や形に親しんだり、友達と仲良く遊んだりしている。	
評価規準	・体を動かして遊ぶことを通して、数に親しんでいる。算数【主】 ・友達と仲良く体を動かして遊んでいる。【主】	
準備物	・音源 ・体育用太鼓	
保育所・幼稚園等で経験してきたこと		接続を踏まえた指導の工夫
主となる接続の視点 ③協同性、①健康な心と体 ③友達と共通の目的をもち、互いに意見を出し合い、より楽しくなるように工夫したり、試したり、協力したりして遊びを進める。 ③お店屋さんごっこなどで、お店の看板や地図、品物の値段など、経験を生かしてより本物らしくなるために、文字や図、数字などを使って表す。また、友達とすごろくやかかるた、トランプなどを楽しむ。 ①自ら積極的、主体的に選択し、自分で、または友達と目的をもって、心と体を働かせて遊ぶ。		○図一人ひとりのしたいことを尊重する→図子どもの思いを尊重する ○図子どもたちの話し合いや相談する姿を大切にする→図子どものアイデアや考えようとする姿を認める。 ○図力を合わせる楽しさや、仲間と一緒にやり遂げた喜びが味わえるような声かけや関わり→図一緒に楽しむ・子どもが納得するまで付き合う・成功を求めすぎずその過程を大切にする・成功体験のサポートをする。
主な学習	○教師の支援 ・予想される子どもの反応	★評価規準 (評価方法)
1. 場所・ルールの確認 2. 「やったね★」(体験済み)から体ほぐしの運動遊び ①踊り(パプリカ) ②おーちたおちた いろんなバリエーション 子どもがお題 ③体じゃんけん 3. なべなべそこぬけ 太鼓2回→2人で座る→2人でなべなべそこぬけ 数を増やしたり減らしたりして繰り返し遊ぶ 太鼓33回→33人で座る→33人でなべなべそこぬけ	○子どもの言葉からルールの確認をする。 ・今日は体育館の前に椅子がいっぱいあるね。 ・挨拶した方がいいんじゃない? ・椅子があるところは行っちゃだめだよ。 ○「こうしたい」「やりたい」等、自分の思いを素直に表現する子どもの姿を見取り、「いいね!」等と共感し、活動につなげる。 ○子どもが「～したい」を表現しやすくなるように、「どれから遊ぶ?」と子どもに問いかける。 ・これをやりたい! ・これを先にやろうよ。 ・知らない人がいっぱいいて恥ずかしいな。 ○体育と算数を関連させることで、子どもが楽しみながら数に親しめるようにする。 ○数を増やしたり減らしたりすることで、太鼓の音を聞く必然性を持たせるとともに、数への理解が深まるようにする。 ・今度は数が増えたよ! ・あれ?太鼓の音はさっきより少ないよ。 ・太鼓が10回鳴ったよ!一緒に仲間になろう。 ・あれ?ぼくたちみんなで何人だっけ? ・足りないよ。どうすればいいんだろう? ・先生も入って! ○友達との関わりが楽しいと感じられるように、提示する数の大きさや速さに留意する。 ○一体感を味わうことができるように、最後は全員で集まりなべなべそこぬけをする。子どものアイデアを生かすなど、子どものわくわく感を損なわないように、教師が支援する。 ・できた!楽しいな。	④道徳性・規範意識の芽生え ①健康な心と体 ⑧数量・図形、標識や文字などへの関心・感覚 ③協同性 ★体を動かして遊ぶことを通して、数や形に親しんでいる。 (行動観察・発言) ★友達と仲良く心と体を動かして遊んでいる。 (行動観察)

資料4 授業に対する保育者の感想

- ・幼稚園で経験してきたことを生かしながら、授業を行ってくださっていることが分かりました。例えば、数を確かめてみようという声掛けから、自分達で数を数え始めていること、さらに全体での確認でより多くの子ども達が数を意識できていること等、幼稚園での学びが小学校でこのように引き出されているのだと知る事ができました。
- ・教師が提示する手順ではなく、自分達がやりたい活動を選んだり、仲間づくりの時にどうしたらいいのか自分達で考える時間をとったりすることで主体的な学びへとつなげていっていることが分かりました。
- ・今回の H 先生のように「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について授業者が指導案等で明確化したり、意識したりすることで、子ども達の学びが幼稚園から小学校へとより濃くつながっていくのだと感じました。
- ・「どこから遊ぶ?」「みんなは、どうする?」と言った教師の言葉掛けが印象的でした。教師の方からの一方的な感じではなく、子ども達の意見を吸い上げて、みんなの活動に生かしているところが良かったと思います。また、一年生には、わかりやすい大きな動作でダイナミックに動かれているのも、すごいなあと思いました。
- ・なべなべそこぬけでは、32 名で輪になった時に、「どこあけちよくか決めちよかないかん」と言う子どもから出た案を取り入れて進めたのも良かったと思います。教師の声は、それほど大きくないが、みんなが指示を聞いていると感じました。一年生で、まだ 9 日目の授業でしたが、教師との関係性がしっかりできていると思いました。
- ・幼稚園とは違う授業の枠組みの中で、子どもの動き・心の動きに気を配りつつ、限られた時間である程度のテンポも作りながら、体を動かす楽しさを味わうことができるよう、様々な工夫をなされていたと思います。教師主導ばかりにならず、子どもが考えて動く機会も作り、子どもの反応を肯定的に引き出す関わりをされながら、大事にしていることはぶれずに落とし込んでいくという教師の責務（信念）の強さを感じました。この関わり方は、私も参考にしたいと思いました。
- ・H 先生の指導案の“指導にあたって”の内容を拝見したところ、入学後の子ども達への温かいまなざしや、支える側の援助や手立てがよくわかり、送り出した子ども達が安心して学校生活をスタートできることに大変嬉しく感じました。公開授業では、新しい環境、新しい友達や先生など、全てが真新しく不安な中でも、子ども達なりに頑張っている姿を見てとても安心しました。ありがとうございました。
- ・幼稚園では保育を展開していく上で、ねらいがその時間やその日だけではなく緩やかに展開されたり、また個人差が大きく見られたりすることもあり、一人一人の子どもに応じた援助や関わりを探りながら日々保育を展開しています。小学校では 45 分間という時間の中でリズムよく授業が展開されていき、その中でも凝縮された学びの多さに驚きました。
- ・数に親しむ活動では、これまで算数セットで自由に遊ぶ時間を取り入れたとお聞きし、楽しい時間の中で数に触れる経験なども積み重なっていることがわかりました。また、友達と仲良く遊ぶという内容は、友達と触れ合ったり関わろうとしたり、子ども達なりに新しい友達を知ろうとしたりできるよう、手を繋いだり目や息を合わせたりしながらグループ作りをする活動を組み込んでおり、工夫されているなと感じました。
- ・園の経験を生かすという視点では、年長児が終わり頃に楽しんでいた集団遊びの活動名やねらい、環境構成などより詳しく伝えていくことで、すぐに小学校の先生の実践へと繋がるのではないかと感じました。今後も情報交換をしたり、互いにすぐに実践に生かすことができるような内容のやりとりができたりすればと思いました。
- ・子どもの経験や学びを生かすとしたら、「おーちたおちた」や「なべなべそこぬけ」は園でもやっているが、内容の量やスピード感が違っていたので、お互いの実践の見合って情報交換をすることで、校種間の段差をより意味のあるものにしていけるのではないかな。
- ・本時の目標に向けた児童の姿としては、2 人組などで行う活動で組む相手がいなかったり、組んでみたものの上手くできなかったりして、輪を離れて立っていた友達に気付いて声をかける姿や、声をかけてもらったことで気持ちを立て直し活動に入る姿などが、「なかよく」で確認されていることかと思いました。
- ・先生の「いっせーので」が合図となって皆で声や動きを揃える楽しさが生まれ、活動への意欲へとつながっていると感じました。楽しいから参加するという主体的な学びの要素となっていたと思います。